

探訪

経営者

INTERVIEW

「日本の農業を勇気づけたい」 エンカレッジファーマーミング 株式会社

角田山を望む広大な農地に並ぶ2棟の巨大な建物の総面積は、実に4ha。「H&B Garden」と名付けられたこの敷地は東京ドームに匹敵する広さを誇り、内部はまるで近未来の栽培施設です。

今回は、最新鋭の農業技術を駆使してミニトマトとリーフレタスの生産を手掛けるエンカレッジファーマーミングの近藤敏雄社長から、事業の概要や取り組みの経緯などについて、お話をうかがいました。

2017年から稼働しているミニトマトの栽培ハウスの概要をお聞かせください

当社は、家庭菜園用の野菜苗等を生産する有限会社鈴木農園（新潟市西蒲区）が2013年に設立した会社です。苗生産からスタートした当社は、その後ミニトマトの生産に乗り出し、2017年に農林水産省「産地生産基盤パワーアップ事業」の助成を受け

【会社概要】

会社名 エンカレッジファーマーミング株式会社

代表者 代表取締役 近藤 敏雄

本社所在地 新潟市西蒲区松野尾468

創業 2013年12月

社員数 80人

事業内容 ミニトマト及びリーフレタスの生産出荷、野菜苗・花苗の生産出荷ほか

て、角田山を望む新潟市越前浜の農地に、ミニトマト専用の栽培ハウス（トマトハウス）を整備しました。

総面積約2ha（6,000坪）に及ぶこの施設は全面ガラス張りで、ミニトマトの生育に必要な温度、湿度、CO₂濃度、水、肥料をすべてコンピューターで管理



「H&B Garden」の全容（新潟市西蒲区越前浜）

する環境制御システムを導入しており、その規模は日本海側最大級を誇ります。見学に来られた方々は、この施設をみて「まるでミニトマトの工場ですね!」とおっしゃいます。正式には「水耕栽培ハウス」という名称になりますが、確かに広大な建物の内部に見渡す限りミニトマト畑が広がっている景観は、近未来の栽培施設のように感じられると思います。

当社は、ここで生産されるミニトマトの食味を楽しんでいただくことはもちろん、ミニトマトを通じて皆さまに「健康 (Health)」と「美 (Beauty)」を提供することで幸せになっていただきたいと考えており、こうした思いや願いを込めて、栽培ハウスに「H&B Garden」という名前を付けました。

■ 栽培ハウスの内部は、どのような仕組みになっているのですか

トマトハウスは、幅約100m、奥行き約200mに及ぶ広大な施設です。建物の高さは6.7mと一般的なパイプ式ハウスの約2倍に相当する高さで、これは天井を高く確保してミニトマトを上方に成長させ、実を鈴なりに付けることで収量をアップさせる狙いがあります。



ミニトマト栽培ハウスの内部

作業の効率面にも工夫を凝らしており、高所作業には専用の昇降機を使用しているほか、選果・計量・パッキングの作業などについては機械化を進め、一部には画像センサーでミニトマトを選別して収穫する収穫ロボットを導入するなど、できるかぎりの自動化・省力化を図っています。

現在、このトマトハウスでは、年間約400トンの

ミニトマトを生産してJAやスーパー等に出荷しており、厳選品については「H&B プレミアム」のブランド名で県内スーパーなどでも販売しています。

■ 昨年暮には、新たにリーフレタスの栽培ハウスも整備されています

当社は、2024年11月に大規模なリーフレタスの栽培ハウス（レタスハウス）を隣接地に新設しています。トマトハウスと同じく2haの敷地を確保しましたので、ふたつの施設を合わせた総面積は、東京ドームに匹敵する広さを誇ります。

建物は半開閉式のガラス張りの構造で、トマトハウスと同様に温度、湿度、CO₂濃度、肥料等は、すべてコンピューターで管理しています。内部では、「ガター」と呼ぶ特殊な栽培レーンが、長さ160mに及ぶ距離を自動的に移動しています。具体的には、スタート地点で種蒔き（播種）したリーフレタスが施設内の栽培レーンをゆっくりと回りながら育っていき、30日をかけてゴール地点に到達したら、そこで収穫となる仕組みです。通常の露地栽培のリーフレタスが生育に50～60日かかるところ、ここでは最先端の農業技術を活用することで、播種から収穫までの期間を半分に短縮しています。



2024年11月に完成したリーフレタス栽培ハウスの内部

まだ立ち上げたばかりの施設で、現在はスタッフのトレーニングを含めた試行段階にありますが、今年3月頃からの本格稼働を目指して、急ピッチで準備を進めているところです。販路は100%確定済で、将来的には1日28,000株、年間800万株のリーフレタスを生産・出荷して、年間9億円の売上高を目指す計画です。

このような大規模な栽培ハウスを作ろう と思ったきっかけは何だったのですか

私は、もともとがサラリーマンで、結婚を機に鈴木農園に入社して、農業に身を投じました。とかく農業は「きつい・きたない・儲からない」というイメージでみられがちですが、経験がなかった私はむしろ農業に憧れを持っていましたので、何の抵抗もなく農業にのめり込んでいきました。

入社して最初のうちは、見よう見まねで作業を覚えるだけでしたが、次第に「もっと効率的で、生産性を上げる方法があるのでは」と考えるようになり、そのうちに機械化した大規模施設で儲かる野菜を作り、これまでの農業に対するイメージを一新させたいとの思いを抱くようになりました。どんな野菜なら自分の構想を実現できるかと考えて、最初に辿り着いたのは、パプリカでした。パプリカは、国内消費量の9割以上が輸入ものであると知り、私が国産パプリカの栽培に成功すれば、国内市場を席捲できるのではないかと考えたのです。しかし、調べていくうちに、新潟の土地柄ではパプリカの栽培が難しいと分かってきたため、やむなく断念することにしました。



上段は環境制御システム、下段はミニトマトの選果作業の様子

そして、次に目を付けたのが、ミニトマトです。ミニトマトは、手軽に食べることができて、しかも美容と健康に効果が高い野菜であることから、市場性が見込まれると考えたのです。周囲からは、資金

負担の大きさや栽培の難しさ等を懸念して反対する声もありましたが、私なりに気象データや栽培方法等を研究・分析したうえで、農業先進国のオランダで実践されている最先端の技術を導入すれば新潟の地でも十分に実現できると判断して、事業に踏み切ることを決断しました。

新たなチャレンジに不安はありませんでしたか

トマトハウスが稼働した当初は、栽培技術の確立にはじまり、スタッフたちの訓練、社内のオペレーションの構築などに手探り状態が続き、残念ながら初年度の経営は赤字となってしまいました。しかし、「入念に研究したプランであり、必ず上手くいく！」と確信していた私は、発生した問題をひとつひとつ丁寧に検証して改善を図っていくことで、2年度目には黒字に転換することができました。



越前浜に広がる当社の広大な農地

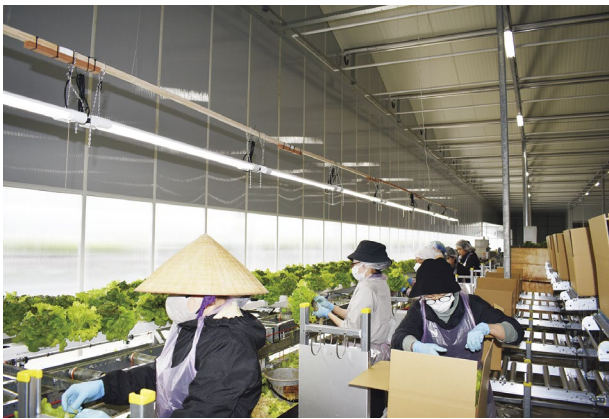
当時は、「自分のやってきたことは正しかった」と誇りに思いつつも、多額の投資を行った施設であっただけに、順調に稼働にこぎつけることができず少しホッとしたことを今でも覚えています。

大規模栽培ハウスのメリット・デメリットは何でしょうか

当社における栽培ハウスの大きなメリットは、まず第1に生産量が安定していることが挙げられます。ミニトマトの場合、通常の露地栽培では8月以降になると出荷量が減少し、その分、市場での価格は9～10月頃が一番高くなります。この点、当社

の方法であれば、年間を通して安定的にミニトマトを栽培できますから、市場に出回りにくい夏場にミニトマトを生産して、価格が高い秋に出荷することが可能です。

第2には、品質の安定化を図りやすいことが挙げられます。当社の場合、栽培ハウスのなかの閉鎖された空間で、土を使わずに養液で野菜を栽培することによって病害虫による被害を未然に防止しています。また、野菜の生育に最適な環境をコンピューターでシステム管理しているため、栄養価が高く、高品質かつ安全・安心な野菜を安定的に生産できていると自負しています。



リーフレタスの収穫とパッキングの様子

そして第3には、機械化によって作業の負担軽減と省力化を実現していることが挙げられます。例えば、レタスハウスで働く社員は、播種のための2人と、最終工程で収穫してパッケージを担当する18人のわずか20人です。施設は365日稼働していますが、作業自体は毎日交代で行う必要がありますが、人手がかかるのは播種と収穫のみです。また、収穫と言っても、腰の高さに流れてくるリーフレタスをガターからはずして段ボールに詰め込むという軽作業で、重い荷物を持つことなどありません。

一方のデメリットは、何と言っても施設の維持にかかる光熱費と燃料費が高くつくことです。この栽培ハウスでは、大型の空調装置を利用して夏は冷房、冬は暖房によって室温を常時14℃程度にコントロールしています。管理はコンピューターで制御していますが、なにしろ施設が広いため、光熱費が高

額になりがちです。特に空調は、冬場の暖房よりも夏場の冷房に多額のコストがかかっているため、このあたりはこれから工夫を凝らしていく余地があると思っています。

■ 今後はどのように事業を展開させていきたいとお考えですか

これまでの農業は、勘と経験に頼る部分が多かったように感じられます。しかし、これから人手不足が深刻さを増してくることを踏まえると、従来以上に機械化・効率化を追求して、生産性を向上していく必要があります。

この点、現在注目しているのはAIです。今までの勘と経験をAIに代替することで、誰もが野菜を安定的に供給できる体制を整備して、農業を持続可能性のある産業へと発展させていく必要があると思っています。



ミニトマトの収穫の様子。一部にはセンサーカメラを内蔵した収穫ロボットも導入中

当社のような大規模栽培ハウスを活用した方式は、現在の農業が抱える様々な課題を解決できる可能性を有しています。新潟県は、夏は暑く、冬は寒くて雪が降るといふ、必ずしも農業に適した土地柄とは言えませんが、当社の方式であればデメリットを克服することも夢ではありません。新潟県の農業を維持・発展させていくためにも、当社のような新しい方法で農業に取り組む第2、第3のチャレンジャーが登場してくれることを願っています。

(2025年1月10日取材 柴山、神保、生亀)